



JAC岩手支部通信 第49号

2019年3月20日発行 (公社)日本山岳会岩手支部



岩手支部安全登山講座



目	次	
JACの動向と支部活動	阿部陽子	1
支部拡大委員会報告	高橋慎一	2
安全登山講座	中屋重直	3
野口幽香子岩鷲登山記	阿部裕二	5
9月 山行:高森～駒ヶ岳	高橋慎一	7
10月 山行:なめとこ山	遠藤征彦	8
11月 山行:前刈山	盛合敏男	10
12月:原台山、忘年会	西村幸雄	11
1月:網張温泉スキー	阿部裕二	13
2月:宰郷山～大欠山	熊谷敬子	14
網張の中村です	中村龍太郎	13
31年度岩手支部 山行・事業計画		15
編集後記	菅原敏夫	10

2018年度スナップ

上から

- ㊦ 万寿山・下山口
- ㊦ 祭時山・健康の森
- ㊦ 原台山・ちょ休憩

上から

- 支部拡大委員会
- 大垂水から遠野方面
- 幕館橋からなめとこ山
- 前刈山(北峰)山頂



平成30年度**JACの動向と支部活動****JAC 岩手支部長 阿部 陽子**

「岩手支部の会員数がプラスに転じた要因は何か、話してほしい」と要請されたのは、平成30年9月29・30日に開催された支部合同会議でのことだった。

近年、会員減少に歯止めがかからない日本山岳会にあって、岩手支部もこの数年は入会者がいないうえに、物故者や退会・他支部移籍など減少する一方で、このままでは支部活動が先細りしていく状況にあった。

私が支部長を仰せつかったのは平成28年4月、今年で満三年になる。本部の統計によると、岩手支部は平均年齢70歳。登山人口が増加したというものの、「若者と接点がない」とか「足腰が弱くなったので自分の仲間を例会山行に同行させる。JACに入らなくてよい」「登ったことのない山に連れてってもらえれば良い」そう放言して、入会を阻んでいた会員もみうけられた。日本山岳会は登山の無料エージェントではない。嘆かわしい状況だった。

果たして、この状況のままで良いのだろうか。このまま新入会員を勧誘できなければ、近い将来に支部の衰退を招くだけ。この共通認識を真っ先に確認し、会員それぞれが本気になったことが大きかった。

結果、三年で会員9名・準会員8名の17名が入会し、30代から70代まで幅広く年代層を獲得した。このことが支部の会員減少をくい止め、会員増に転じたという。本部理事会からは、会員の減少をくい止め、プラスに転じたその源はどこにあったのかと注目されたようだ。

17名の仲間を得ることができた要因を、ここに振返っておきたいと思う。

- 1、「お友達作戦」登山を愛好する友人知人に対し、年代を問わず積極的に入会をすすめる。
- 2、「日本山岳会」と言えば敷居が高い。そんなイメージを払拭する。技術向上を望んでいる一般登山者を対象にした講習会を開催し、新しい出会いのチャンスをつくる。
- 3、会員に対しては、岩手県山岳協会が主催する講習会に参加してもらい、他の山岳会と交流できるようバックアップする。
- 4、山の日制定記念「みんなでふる里の山に登ろう」で、市民を募集する事業を企画する。8月11日にちなみ811mにこだわった山行を二年間続けて計画し、会員獲得のきっかけを作った。
- 5、岩手山8合目小屋の管理に参加する。

その他、マスコミの力添えは有難いことだった。12月15～16日に主催した「安全教室を開催するための講座」においては、岩手日報紙上に座学の講習シーンが写真入りで報じられたし、IBCラジオ放送「いわての山トレッキングガイド」でも重廣恒夫副会長のインタビューを3回にわたって放送。加えて本部からも、支部事業委員会の後援でバックアップしていただいた。

若い会員が数名入会したことにより、例会山行に読図を取り入れた。冬山登山やバックカントリーを愛好する会員には、八幡平で活動する平山順子会員が、源太ヶ岳エリアの雪崩を避けたコース選び、および雪質検査の技法をとりいれた研修ツアーを実施している。まさに岩手支部の会員が持てる能力を結集した二年間であったと言える。

JAC会報「山」2019年2月号（No.885）
「ビックデータを活用した地形図修正の

新しい取り組み」国土地理院：大塚孝治氏に注目した。登山道具は日進月歩である。従来の地図とコンパスとGPSに加え、GPS機能付きのスマートフォンが普及。「ヤマレコ」や「ヤマップ」のビックデータを活用した地形図修正を始めたとある。

そこで新年度 2019 年の勉強テーマは、登山におけるナビゲーション能力を養う、である。1/2万5千地形図を取りこんだパソコン画面で磁北線を加筆できるなど、たいそう便利になった。

どんな機能であれ、地図を使いこなせるよう皆で勉強しましょう。学ぶ楽しさが、岩手支部会員の増強につながっていけば、なお理想的である。できれば夏「地図読み講習会」を計画したいと思う。

[illegible]

支部擴大委員會報告

期 日 平成 30 年 12 月 8 日(土)

場 所 碁石溫泉「海樂莊」

報 告 事 務 局 長：高 橋 慎 一

12月例会「原台山」山行を無事に終えて、午後4時半から大船渡市内の基石温泉「民宿海楽荘」広間にて会員12名が参加して拡大委員会を開催した。はじめに、阿部陽子支部長から日頃の支部事業への協力、新会員獲得の取り組み等に感謝しますとの挨拶があり、新会員となった齋藤忠利、中村龍太郎、渡辺理雄、高橋勇一、高橋瑞穂(敬称略)5名の紹介があった。

主な議題としては、JAC 支部合同会議 (9/29・30) では全国との温度差を感じながらも、岩手支部の会員増の取り組みが高く評価されているとの報告があった。また直近の事業であるが、JAC 副会長重廣恒夫氏 (支部事業委員会) の協力を得て、「安全登山教室」開催のための講座(12/15,16)を実施することになった経緯や目的、内容についての説明があった。東北 5 支部および岩手支部から計 25 名の参加申込みがあった。盛岡で座学、東根山周辺で実践講習が行われる。

菅原敏夫会員からは、8.11「山の日記念」石上山登山の協力のお礼と会計報告があった。

また、来年度の山行事業計画について協議し、8月に北海道駒ヶ岳(大沼)登山や「山の日記念」公募登山の実施、12月の支部忘年会は釜石市(鶴住居町)で開催など、年間計画案が概ねまとまった。

【参加者 12 名】高橋愼一(事務局)

菅原敏夫、熊谷英雄、渡邊博厚、阿部陽子
中屋重直、西村幸雄、畠 登、高橋 耕
遠藤征彦、滝浦弘美、高橋万見子

（公 社 ）日 本 山 岳 会 岩 手 支 部 主 催

『 安 全 登 山 教 室 』 開 催 の た め の 講 座

講師 日本山岳会副会長 重廣恒夫 氏



安全登山セルフレスキュー講習会が支部忘年会の翌週 12 月 15 日・16 日の二日間開催された。講師は重廣恒夫副会長。氏

は長く本部常務理事、常任評議員、関西支部長などを歴任し、昨年から副会長に就いておられる。30 歳で K2 南東稜、33 歳でチョモランマ北壁登攀リーダーを始め、数々のヒマラヤ登山歴を経験して来られた。1995 年マカルー東稜初登攀の隊長をつとめた直後には、JAC90 周年記念行事で岩手支部にも来られて、ホテル東日本で特別講演をして下さっている。

この講習会は岩手支部の今年度の行事予定には入っていないし、心つもりをしていなかったが、全国会議のおり、これこれの日程で東北ブロックの安全登山講習のための実地指導をおこなうので岩手で引きうけて、と阿部支部長に重廣氏から直接のお話があったということだ。新入会員が相次いでいる点で全国から注目されている岩手支部だからこそ、という話だった。時間が非常にせまっていたので、いそぎ座学と宿泊先会場を予約し、東北各県に説明して参加者を募った結果は、ご覧の通りの満杯盛況となった。岩手支部だけでは指導者と次指導層がこれだけ集まらなかったろう。

座学講座の内容は、教室開催の理念、山岳遭難の未然対策、登山計画と地図読み、携行品など関西支部で継続しておられる初・中・

上級の各カリキュラム、リーダーの役割など充実していた。さらに「JAC のヒマラヤ登山」の映像による講話が宿泊先のききょう荘であったが、これなどは広く一般愛好者にも聞かせたい興味深い内容だった。

実践登山は東根山と謳っており、登山口で朝合流参加する、と希望された方がいたがそもそも通常の夏道を辿るコースは想定していないとのことだった。そのためもあり、重廣氏は前日から岩手入りして、山の状態の下見を済ましているとの周到さを見せた。全員ききょう荘前での準備体操の後、道路脇の斜面にとりついて登攀、転落防止、確保など実習をおこなった。方角的には袖滝沢から東根山中腹の水場に向かう方向の尾根ではあったが、昼までの短時間なため途中で折り返して別の尾根を下ってもどった。この日は気候がよく、終始雪道にいたけれども寒さに凍えることがなくて済んだ。

この講習会について岩手日報紙上に記事として掲載されたが、これは渡邊会員のおかげだし、岩手放送では「いわての山トレッキングガイド」の 15 分番組を 3 週続けて重廣副会長と阿部支部長へのインタビュー特集を放送した。朝日新聞社の会議室を会場として準備してくれたのは高橋（万）会員だし、大量の講座資料の複写は高橋（耕）会員の事務所に助けをいただいたおかげである。また、講座終了後、12 月 26 日に有志が集合してロープワーク等の実技訓練を復習したことも記録しておく。

来年度には支部会員が講師となって、一般募集で安全登山教室を開催する方針を阿部支部長は提案している。（中屋重直 記）

第一日 座学講座



必携品一氏が実際に持参している必携品を展示、特徴・使用方法を説明



オートブロック・システムーロープ、カラビナ、巻き付け結びの実演



「JAC ヒマラヤ登山」の映像を見る

第二日 実践登山



ききょう荘の裏から山に入る準備



ロープワークの実地指導



急斜面での安全確保

講座参加者	青森支部3名、秋田支部1名、宮城支部3名、福島支部2名
岩手支部	阿部陽、中屋、高橋慎、渡辺正、菅原敏、高橋万、滝浦、中村 高橋瑞、盛合、高橋勇、熊谷敬、遠藤正、澤口、中谷

調 査 研 究

野口幽香子 岩鷲登山記

阿 部 裕 二

今年は仕事の都合で、ほとんど山へ行けず、残念な一年でした。そんな中、『明解日本登山史』（布川欣一著ヤマケイ新書）を読んでいたところ、「第3部 岩と雪の時代 14 女性のパイオニアたち」に、興味深い記事がありました。それは、日本山岳会会誌「山岳」第1年（1906明治39年）第3号に、野口幽香子「岩鷲（岩手山）登山記」があるということでした。野口幽香子氏は、明治・大正期の日本山岳会女性会員6名の一人で、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大）卒、保育園設立に尽力した人物です。なを、日本山岳会は1905年創立です。

東京に所用で行ったついでに、市ヶ谷の日本山岳会本部事務所に行き、該当資料をコピーしてもらってきました。B5で11枚の内容で、全部はご紹介できないので、今から110年程前の岩手山登山の様子を掻いつまんでご紹介したいと思います。

まず、御鉢めぐりの段で「岩手山はコマクサの名所とかねてききたれど、かく迄に美しくかく迄に多からんとは、實に思ひもかけず」と非常に感動して述べています。尤も、今では許されないことですが、野口氏は、山菜を採る如く、採集籠に色々な高山植物をゴッソリ採取している所が、今とは大分違う所だと思います。今から百年ほど前の岩手山の御鉢の高山植物の美しさと、自由な高山植物採りが、まず、一番今とは異なる所だと、思います。

野口氏は、「白馬登山の紀行を読み、餘りのおもしろさにわれも亦いつかは此味をなめでは止まじと其夜心に決しぬ」と記しています。

しかし、なぜ岩手山なのかは書いてはいません。準備物として、「脚絆、足袋、帽子、ゴザ、手袋、杖、罐詰、ドロップス」などを挙げ、服装は、「瑞典（スウェーデン）式体操着」と決めています。

7月29日東京を出発し、仙台、塩釜、松島などを見物し、盛岡で数日天候の回復を待ち、知人や宿の主人やその親戚等総勢八人それに人足三人で、出発しています。その様子を、「揃ふて列びたる状は、仮装行列にても始まらんかと思ふばかりなりき」と記しています。

8月7日朝4時半、盛岡の下厨川を細雨の中、馬車で出発し、柳澤9時半着。柳澤から1時間行き、しばらく歩き「馬留（多分、今の馬返し）」という所に到着。ここから「ゲダイ坂」という鎖のある急坂を下りて、「やがて受取坂（今の改所跡でしょうか）に着きぬ」とあります。「茲に水あり・・・荒れたる小屋あり・・・山役銭の札をここに受け取るなり・・・山役銭とは登山者の為め道普請の費用として一人五銭（今の価格で五百円から千円位）を納るなりき・・・此受取坂の下が眞の山麓なり」と記しています。今の馬返し登山口とは少し様子が違っているようです。この受取坂を雨の中、12時半に出発しています。

やがて、「コガノフチ」、三合目等を過ぎ、「六合五勺のお蔵石（今の御蔵石）といふに着きぬ」「ここは眞に恐ろしと思えり。大きな山の如き岩の右と左に路あり。辛うじて一人を通ずるのみ」「右の道は新道にて鎖あれば皆此方を選びて進む。鎖につかまりて登らんとすれば、足はズルズルとすべりて登る事能はず」「お蔵石のいはれさんざんときかされたれど、言語更に解せず終に要點をも止むる能はざりき」とあります。

御蔵石は今でも難所ですが、百年前の昔は左右に路があり、右側には鎖があったようです。左側の道はもう崩れて、なくなっていますね。今から百年、二百年後には御蔵石も谷に落ちてなくなってしまうかもしれません。

やがて「一面朦朧」とした中、「九合目の不動平の小屋」に、受取坂から五時間半で着きます。この小屋は、いまの九合目の不動小屋の近くの岩室跡にあったものと思われます。この小屋には、「處柄アイヌの子孫にもあらんかと思はるる男」がいて、焚火があったと記しています。また、「さすがにここは宿屋なり、茶碗などありしと見えて、温かき御飯山の如く盛りて進められたる時は、をかしくも亦嬉しかりき」と書いてあります。

この小屋の燃料は、周囲の這松を（も？）使っていたようです。今の九合目の不動小屋の北西のベンチが並んでいる辺りは、多分、百年前は這松が一面に生えていたのではないかと思います。

翌日、8月8日午前五時半、一同小屋を出てお鉢めぐりをします。雨は止んだけれども晴れる様子は全然なかったと記されています。前に書いた通り、「岩手山はコマクサの名所とかねてききたれど、かく迄に美しくかく迄に多からんとは、實に思ひもかけず」と非常に感動して、野口氏はコマクサ掘りに夢中になり、あまり時間がかかるので、自分が一人留まって「コマクサ百株、タカネスミレ五十株も」掘ろうかという人足に、凡てを任せて歩を進めています。

「やがて薬師嶽といふに着く、岩手山最高の地海拔六千七百餘尺なりといふ陸軍の櫓あり、薬師の石像あり。頂狭く八方雲に閉ざされて、さながら雲中に立てるが如し。莊嚴いふべからず・・・せめては諸高山の頂にても見ゆるを待たんと、暫し憩ふ。天気良くば早池峰、岩木、月山など見ゆといふ。をしき限りなり」といった具合に、お鉢めぐりに三時間半かけています。

下山時「宿料を問へば、一人前五銭、水代凡てにて十銭なりといふ、何とてかくは簾なるにや。今少し多くを得て、せめては疊にても敷きたらんにはといへば、否とよ、多くを取れば此石がけ直に崩るなりといふ、面白

し」とあります。

こうして午前11時半に下山にかかります。

下山は、前日の道を下り、三四合目の頃、次第に晴れて、虹が出たり、北上川、盛岡の街並みが見られたとあります。

「受取坂に着きしは四時半にて、正に五時間を費し、登山時と殆んど時を同じうす。しかも此日は雨は降らぬなり・・・六時半柳澤をいづ。又荷馬車にゆられて、行きとは異なる恐ろしきまであしき路を、ゆられゆられて歸る。空全く晴れて、月明らかに、ふりかへれば南部富士の姿、ありありと手に取る如く見ゆ悔しさ限りもなし。きけばわが登りし前夜は頂上月よりかりしといふ。此夜は頂上の景如何ならん。げに女人の登山、山の神のたたりし事よと自らあきらめぬ。厨川へ着きしは夜の十時なりき。」と、最後は述べています。

以上が今からおよそ百十年程前の「野口幽香子 岩鷲登山記」の概要です。今から約百十年ほど前の「野口幽香子 岩鷲登山記」はいかがだったでしょうか。私は、御蔵石の右側の道が崩壊してなくなったことと、九合目の不動平の小屋の燃料が這松で、恐らく今ベンチが並んでいる辺りの這松が燃料にされたらしいところが、印象に残りました。「自由？」な高山植物採取も同様です。

「神社仏閣ノ地ニテ、女人結界ノ場所コレ有候処、今ヨリ廢止サレ候條、登山參詣等勝手トナスベキコト（1872、明治5年3月27日付太政官布告第98号）」により、千年も続いた「女人禁制」は廢止されましたが、しばらくは旧態依然の状態が続き、30年程経ってから、ようやく女性も靈山登山をするようになったようです。

山の歴史も、近代登山以前、近代登山の幕開け、岩と雪の時代、大正登山ブーム、多様化する登山と、変化してきています。山関係の装備や服も年々進歩改良が進んでいます。

一方、山も少しずつ姿を変えています。岩手

山の御蔵石の右側の道はもう崩れてありませんが、御蔵石自体も崩壊の危険があり、今の新道が作られたのは 50 年ほど前だったと思いますが、立ち入り禁止や規制、或いは御蔵石周辺の新ルートの開拓等の検討が必要かもしれません。岩手山御神坂のルートの上部も同様に心配なところです。皆さんはどう思っているのでしょうか。

自然は壊されると回復するまでに、長い時間がかかります。皆で自然保護に努めたいものです。

さて、今は、岩手山には八合目避難小屋があり、岩手県山岳協会参加の各山岳会による管理当番が、夏、行われています。当然岩手支部も例年、管理当番にあたり、荷揚げ、清掃、パトロール等の活動を例年行っております。人数は多いに越したことはありません。支部会員皆さんのご参加をお願いします。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

踏査ルートは GPS ログの→に沿う実線



9 月 例 会 山 行 平成 30 年 9 月 8 日 (土)

高森 (834m) ~ 駒ヶ岳 (1129m) 踏査

高 橋 慎 一

2 年前 (平成 28 年 8 月)、「山の日」記念支部公益事業として夏油高原「高森」と「三角沼」を踏査する公募登山を開催、制定日にちなみ 811m 地点や目的地 2 か所を参加者全員で巡り歩くことが出来た。「高森」は旧南部・伊達 (仙台) 領との境界の痕跡であり藩境塚の一つである。2.5 万分の 1 地形図 (夏油温泉) では北上市と金ヶ崎町市界に沿って標高 834m 地点で示されている。さらに奥へ続く道をたどると駒ヶ岳に達するであろうか、興味が湧いてぜひ踏査したいと思い、今回実施した。

調べてみるとさらに 8 年前 (平成 22 年 6 ~ 7 月) に、駒ヶ岳山頂に鎮座する駒形神社奥宮造営のための荷揚げなどにこの道を利用したようだ、やはり山頂へのルートであると確信を持てた。

入畑ダムの先にある夏油大橋手前で左折、そこから林道を 20 分ほど行った所で車を止め歩き始める。ほどなく三角沼へ向かうスペースがあり車の終点、ここが登り口でこの先は登山道ではなく山道になる。

9:15 出発、今回は 7 名が参加、中屋氏の GPS や澤口氏の電子山岳マップなどで正確な位置が確認出来る。

9:40 高森通過、わずかな踏み跡の細い道を進んでゆく。傾斜は緩いが足元や頭上に注意しながら登ってゆく。

ほぼ中間地点で小さな沢があり渡渉、腰の高さほどある枝葉が道を覆って分かりづらくなる。11:00 さらに平坦な場所を抜けて登りきると夏油温泉からの登山道と合流した。

GPS で確認するとこの地点は山頂側に近く、実際の登山道は地図上のコースよりかなり南側を通っているのが分かった。ここからは最後の急登、足場の悪い斜面は滑りそうになる。よくぞ資材を担いでここを登ったかと思うとボランティアの人達のご苦労が感じられた。11:40 前方に開けた灌木帯を越えると山頂に着いた。

後続も到着、全員が踏査出来て感慨がわいた。造営された奥宮の前で思い思いのポーズで記念撮影、眼前に経塚山が聳え 360 度の展望に恵まれた。



復路は来た道を外さないように慎重に下った。このルートは金ヶ崎からの登山道より少し距離が短く、本来の奥宮参拝道であろうか、又かつて藩境界として争いが生じた因縁の道であったろうか、ともかく歴史ロマンに溢れる道だろう。14:00 思いを巡らしながら無事に登山口に着いた。さらに林道を下り駐車地点に全員が帰着、瀬美温泉に移動して解散となった。駒ヶ岳へ通じる道が確認出来、満足した山行であった。

【コースタイム】8:30 瀬美温泉発→林道脇
駐車→9:15 登山口→9:40 高森→11:00 夏
油コースと合流→11:40 駒ヶ岳山頂
12:30 下山→14:00 登山口→駐車地点→
14:40 瀬美温泉着解散(上り約 3.0 時間、
下り約 2.0 時間、実行程 5 時間)

【参加者 7 名】高橋慎一(幹事、記録)
中屋重直、菅原敏夫、阿部陽子、滝浦弘美
遠藤征彦、澤口 誠

10 月例会山行
平成 30 年 10 月 14 日(日)
なめとこ山 (860m)

遠 藤 征 彦

幹事を担うにあたり、未踏の山であるので、中屋さんのリーダーと下見登山の約束を取り付けた。また、公益 B (自然観察会) の一般参加もありとのことで、農業水利「豊沢ダム」とその水源涵養を担う「なめとこ山」の資料を用意することとした。ダムは改修工事中で、関連道路に月～土の時間規制があり、登山は日曜に限られることとなる。

日程を 10 月 7 日とし、9 月 22 日に下見登山を阿部支部長、中屋さんの 3 人で実施した。鉛温泉スキー場で、私の軽自動車に乗り合わせ、豊沢ダムを経由し登山口に向かったが、「豊沢金精大権現神社入り口」は草に隠れていて通過してしまった。戻って駐車スペースを確認し、小型車なら 3～4 台可能だが、除草の必要を感じた。金精神社の先の登山道は、踏み跡程度でヤブの中となった。途中の倒木の所で先が不明瞭となったが、古いテープを見つけ通過でき、地図上の 740m 三角点鞍部付近に着いた。下見はここまでとし、三角点探索をしたが発見できなかった。登路途中、地元のきこ獲り 3 人組と、大きなマイタケを収穫した 80 代というマタギの末裔という方と出会い、この方からいろいろなめとこ山周辺にまつわる話を伺うことができた。

10 月 5 日、会員 11 名一般 2 名 13 名 (内女性 3 名) の登山計画書を提出したが、本部には台風 25 号接近の恐れもあり延期もしくは中止もありとした。台風接近が確実なので、滝浦さんと手分けして 1 週延期を前提の意向確認を行い、7 日しか日程がとれない人が複数居られたが、代表幹事責任で 1 週延期を決めた(支部長には翌日連絡)。

10 月 7 日、朝から雨混じりの強風の中、駐車場草刈りに向かった。雨具を付けての作業中 1 台の車が到着、現れたのは 7 日しか日程の取れないという猛者連、阿部・中屋・菅原 (敏)・澤口・中村 (龍) の 5 名であった。三角点鞍部から先の道への目印テープの取り付けと、下山後、コースの留意点を教えてくれるようお願いし見送った。

1 週間後の本番は、残り 8 名中一般参加 2 名を含む 3 名が欠となり、急遽 7 日都合のつかなかった高橋慎一さんの参加をもらった。また、公益 B の一般参加可は生きているものと判断し、サポート役も担えそうなヤブ山仲間と岩手農業短大岳部 OB 会仲間に声をかけ、それぞれ 2 名計 4 名の参加があり、改めて 10 名の参加者で登山届けを提出した。さらに、阿部支部長のアドバイスをを受け、集合時間を早めてヘッドランプ等の用意も伝えた。

当日、鉛温泉スキー場駐車場で、簡単な自己紹介とコースの説明、歩行順番の遵守などを伝え、4 台の軽自動車に分乗して登山口に向かった。登山口で準備中に、1 台の乗用車が通過して行った。金精神社で今回の登山の無事祈願などしていると、地元花巻からという後続 3 名が合流した。3 名も初めてのコースということで我々の後に付いてくることとなった。神社の先からの歩きで、谷側とそれ以外の林相の違い (伐採の有無) や、尾根筋に混在するヒバ (檜アスナロ?) の自然林について、自然観察会もどきを実施した。下見で迷った倒木地点も少しの停滞で通過、740m 三角点鞍部に着いた。ここで小休止、トップを反対コースから下った経験のある滝浦氏に交代した。ヤブは濃くなり身の丈を超す位となるが、目印は適度に取り付けられてあり、阿部支部長のレポートのとおり右折気味に標高で 50m ほど下り、なめとこ山本体 650m 鞍部に着いた。一部作業道跡らしい道を経由し標

高差 200m の最後の登りとなる。トラバース気味の登り地点で踏み跡が不明となり、道探しに少々停滞を強いられたが、そのまま斜めに登るのが正解、山頂に到着した。登山口から山頂まで、休憩と停滞時間を含め 3 時間 20 分の登りであった。



頂上には 40 分滞在、後続 3 名を含めた集合写真撮影やら林間からの遠望など、ゆっくりしたいところであるが、軽い昼食後には下山とした。下山もトップは滝浦氏にお願いした。トラバース地点では、踏み跡が乱れており、まともな停滞を余儀なくされた。作業道跡らしい道にもどりそのまま進んだが、先頭から登り返し口を通過してしまったらしいとの連絡。右手の斜面を登り、テープのある踏み跡に戻り、少しばらけてしまったが 740 三角点鞍部付近で一息入れた。ここでは、後に山頂を出発の後続 3 人組が先になっていた。この先は、迷う所は無いが、アスナロ尾根と金精神社での待ち合わせを確認し下山を続けた。

アスナロ尾根辺りから、小雨模様となり雨具を付け、金精神社で登山の無事を報告、最後の集合写真を撮り、登山口に戻った。



休憩・待機時間を含め、山頂から 2 時間 50 分の所要時間であった。スキー場駐車場に戻り、簡単な反省会の後、解散とした。

それにしても、7 日には猛者連が林道で熊さんに出会ったというが、今回はその気配は感じられず、多分に、我々の気が付かない林間から、「いつになく、人間が多いなあ・・・」と眺めていたのだらうと思う。なめとこ山の熊さん、お騒がせして済みませんでした。

「コースタイム」

登り：登山口 9:10 発 — 山頂 12:30

(休憩・待機時間含み 3 時間 20 分)

下り：山頂 13:10 発 — 登山口 16:00

着 (休憩・待機時間含め 2 時間 50 分)

【参加者 10 名】 遠藤征彦 (幹事)

会員：近藤有慶、菅原純悦、高橋万見子
高橋慎一、滝浦弘美

一般：坂本幸男、佐藤直樹、金釜貴輝
菊池淑子

編集後記-1

4 月の台温泉～万寿山を手始めに月 1 回の例会を予定通り歩き、それぞれ幹事から思い出を呼び起こす記録を寄せていただき紙面を飾ることができた。さらには、山の日記念山行では一般募集による山岳愛好家とともに石上山を踏破、12 月には JAC 副会長重廣恒夫氏を迎えて「安全登山教室」のための講座を開催、東北各支部代表者を交えて 2 日間の研修を実施した。

このところ、これらの支部行事では新しい会員にお目にかかることが多く、若く逞しい行動力に圧倒される。思うに、準会員制度の創設と支部長はじめ役員諸氏の支部への思い入れの成果ではなかろうか。

阿部裕二会員の調査研究は、100 年前といまの岩手山、自然保護に対する違いが述べられていて興味深い。→P12→

11 月例会山行 平成 30 年 11 月 10 日 (土) 前刈山 (913.5m) 宮古市

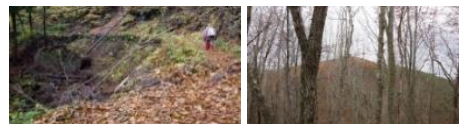
盛合 敏男

9:06 登山口(車止め)を、案内の渡邊氏と共に出発。昨日までの雨もあがり、早朝はくもりだった空も天気が回復し陽が差している。

登山口を進むとすぐに林道が前刈川に崩れ落ち 3 分の 2 ほどになっている。2 年前の台風 10 号の影響と思われる。少し進み渡河となる。渡河は源流まで数回繰り返すことになる。

9:14 川沿いの道から少し山側に入ったところで、案内をしてくれた渡邊氏が引き返す。陽が差して暖かい。9:28 山の神の石碑を通過。石碑には「昭和 13 年 12 月 12 日」と刻まれている(標高 450m 付近)。10:00 源流二股に着き右股へ進む。ここで山道を離れる。すぐに小滝があり右に巻く(標高 520m 付近)。10:37 上の三股を左又沢(一番顕著な沢)へと進む(伏流水となっている)。沢から右尾根へ沢の上部を詰める。昨日まで数日雨が降っていたため足元の枯葉の下はぬかるんでいる。踏み込むと滑るようであり、雪山を思わせる状況である。軽アイゼン(6 本爪等)でもあれば楽だったと思う。

11:18 尾根までの途中の岩場を通過(標高 750m 付近)。途中に下山を考え目印をつける。11:30 稜線に出る(標高 860m 付近)。稜線上を進む前方に前刈山山頂が見える。



崩落した林道

前刈山

12:05 刈屋側の登山道との合流地点通過。
12:19 前刈山北峰山頂着(標高 912m) 北側に堺の神岳が見える。南西方向には早池峰山の裾野が見える程度である。12:22 全員が前刈山北峰到着。前刈山南峰へ移動する。

12:28 前刈山南峰山頂(三等三角点)着(標高913.5m)。三角点を確認し、記念写真撮影後に昼食となる。



前刈山（南峰）山頂

13:07 前刈山山頂(南峰)より下山開始。

13:17 刈屋からの分岐通過。13:45 登山時の稜線通過。前刈川源流に向け下山となる。下山途中足元が滑り残雪期の下山を思わせる。表面は枯葉、中は泥でぬかるんでおり、下りは登りより大変である。足場が非常に悪い。

14:08 川の上流部、源流域に到着。川の流れて下り下り。14:17 登山時の休憩地点に到着し休憩とする。15:01 山の神の石碑通過。

15:15 登山口到着。全員何事もなく無事下山し解散となる。



三角点(三等) 石碑(山の神) 源流への下り

前刈山の通常の登山ルートは刈屋(北側)からであるが、平成28年の台風10号の災害で林道が数ヶ所崩壊し通行不能となり、腹帯(南側)からの山道を利用した登山となった。一週間前に渡邊氏が、菅野氏と共に登り、その時の資料(ルート地図・写真)で山の状況の説明を受けた。渡邊氏から頂いた資料を基に、現地と地図の確認、高度の確認をしながらの山行だった。渡邊氏の協力のお蔭で無事山行を終えることができた。改めて感謝したい。

【参加者 7名】 盛合敏男(幹事)

澤口 誠、滝浦弘美、斎藤忠利、阿部陽子
中屋重直、高橋万見子

【協力者】 渡邊博厚(資料・案内)、菅野恵太

12月例会山行

平成30年12月8日～9日

山行：原台山 894.2m

忘年会：民宿 海楽荘(宿泊)

西村 幸雄

忘年山行話が出そうなので

原台山：山名はアイヌ語「ハッタラ」（大きな淵に由来するという）・・・三省堂・山名事典。

下見登山を5月27日に釜石市の畠さんと行った。登山口の陸前高田市立博物館の前庭に車を止め、林道をひたすら進み五合目で小休憩。ここまでなら4輪駆動車なら来れるなあ～、と話し合う。

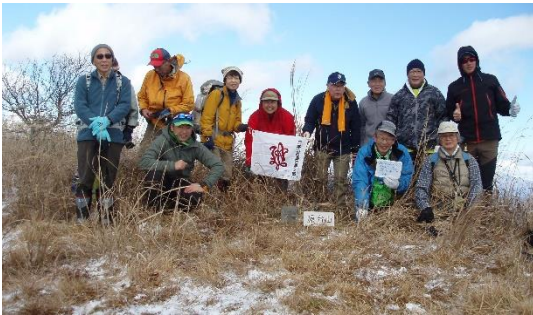
八合目より山道に入る、足下が綺麗に刈り払いしてあり苦にならない。右側には樹齢がどの位かわからないが見事な「山ツツジ」の大きな木が所々にあり、ご丁寧にも寄って下さい？ 近くまで刈り払って暫し見とれました。山頂には到着予定12時を30分もオーバーして到着、眺望は西側に奥羽山脈が大きく広がる。ここにもツツジの群落があり疲れを癒やされる。昼食もそこそこに下山開始。

五合目で小休憩、軽トラックが登ってきた。運転して来た男性が「入口の車は貴方達のか？」、「ハイそうです」と応えたら、「心配して探しに来た」という。自分たちの立場と例会のことを説明し理解して頂き感謝申し上げる。「それでは下るから乗っかれ」と言う、荷台と運転席に分かれて乗車。この地区には生息していなかった「イノシシ」の捕獲があったと言う。

例会山行 12月8日(土) 晴れ

温暖な県南地方と言われる当地も急激に冷え込みました。集合場所に12名が勢揃い、登山口まで移動、新入会者の方達もおり自

己紹介し登山開始。幹事の自分は都合があり登山することが出来ないので此处で一旦お別れし、今宵再度お会いすることを約束。リーダーを澤口さんに依頼する。



【登山参加者 12名】リーダー：澤口 誠
阿部陽子、畠 登、大友厚夫、中屋重直
遠藤征彦、高橋慎一、菅原敏夫、滝浦弘美
渡邊博厚、高橋勇一、高橋万見子

支部忘年会

会場の確保：沿岸地区では復旧・復興に向けた各種取り組み工事が多く関係者の出入りも激しく宿泊予約が難しい。下見登山（5月27日）の帰り予約をしようとしたら「予約は3ヶ月前からです」とのこと、でも仮予約で受けておくので3ヶ月前にもう一度連絡を下さいと言われた。9月9日に予約が確定し一安心。

拡大委員会終了後、登山グループ8名に宿泊食事グループ3名加わり11名での懇親会（忘年会）が開会された。「海楽荘」の名物料理“カブト煮”が大皿にデンと乗っている。また、この季節なら絶対に食べたいと内心期待していた「アワビ」もなんとかお皿に盛り合わせてある。…またまた安心。



海楽荘名物「カブト煮」

後ろの座布団と比べれば大きさがわかる！



季節料理「アワビ」

充分に懇親を深め、まだ足りない方々はお部屋で充分なくらい深めあった。

翌朝、玄関前で写真撮影後灯台から雷岩までの散策。インフォメーションセンターに立ちより復興国立公園トレイルルート地図を戴き解散。

或る方の年賀状に、「アワビ」について次のように記してありました。『原台山はふるさとの山、麓の集落「京津畑」は隣町。昔眺めた野焼きを思い起こしました。アワビを食べ、入れ歯を欠損、やはり高価なたべもと実感した次第です。』

【忘年会参加者 11名】西村幸雄（幹事）
阿部陽子、高橋 耕、高橋慎一、熊谷英雄
畠 登、菅原敏夫、遠藤征彦、中屋重直
滝浦弘美、高橋万見子

（12月例会山行・忘年会通算参加者 15名）

編集後記－2

支部通信には支部活動の集大成としての役割があり、編集者の責務の重さを痛感しつつ、この冬をPCと共に過ごした。奮闘の幾ばくかでもお伝えできれば嬉しい。

編集後記は最後の最後に記載するものらしいが、裏表紙にはむしろ「年間事業計画」こそがふさわしい、と。結果、編集後記は中記となり、しかも2分割。編集子の思い付き、でした。（菅原敏夫）

1 月 例 会 山 行 平成31年1月12日（土） 網 張 温 泉 ス キ ー

阿 部 裕 二

1 月 例 会 は、網張温泉スキー場で、ゲレンデスキーでした。まだ雪不足で、一部ゲレンデには少し石が出ている所もありましたが、風もなく穏やかな天候で、絶好のスキー日和でした。

9：30、スキーセンター集合・挨拶・準備体操後、スキーの基本動作の確認（重心、上下動、膝の動き、



肩のライン、上半身の先落とし等）をし、その後、昼食をはさみ、各ゲレンデでの総合滑降を楽しみながら、手の動き・位置、エッジの切り替え等のアドバイス等で、技術の向上に励みながらスキーを楽しみました。

土曜日のゲレンデには小学生のグループが皆ヘルメット着用で元気に滑っていました。また、三沢の米軍関係者と思しき白人グループもいました。下倉や奥中山、西岳のゲレンデでもよく見かける情報交換もなされました。

午後はもっぱら第三リフトを使い、積雪状況の良いトドマツスロープと双子滑走・林間コースを交互に滑り、楽しみました。

3時過ぎ、第三リフトを降りたところで、解散となりましたが、雫石スキー場の高倉山付近に彩雲が見られ、綺麗でした。高橋万見子さんは、最初、左ターン時の右足がうまくいかないといっていました。滑りやすくなったように感じました。

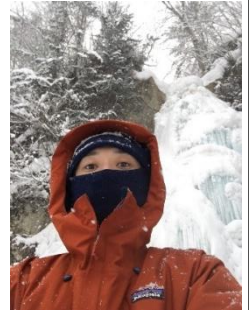


【参加者4名】阿部裕二（幹事）、高橋万見子
阿部陽子、滝浦弘美

入 会 ご 挨 拶 網 張 の 中 村 で す

この度、JAC 岩手支部に入会致しました中村龍太郎と申します。

私自身の初登山は幼少期、山が好きだった親父に連れられて登った「姫神山」だったのを今でも覚えています。



それ以来、大人になるまで登山と無縁の生活でしたが、社会人になり仕事先が栃木県的那須だったこともあり、次第に山への興味・関心が増えてきました。そしてただ周りに山に詳しい知人がいるわけでもなく、とりあえず自分なりの独学で那須連山や、日光白根山、安達太良山などを登っていました。

3年ほど前に地元・岩手に戻り、網張温泉で働いています。土地がら、登山のお客様や山の関係者の方々と接する機会も増えていきました。その中の網張登山ツアーの仕事で支部長と出会い、こうして岩手支部の一員となった次第です。（当時は何も思っていないでしたが、幼少期の親父との山行からすべてつながっているのかなあと、今更ながら感謝していました。）

今まで山については、雑誌やインターネットなどで自分なりに感じ、学んできた山行です。しかし JAC に入会し、支部長をはじめいろいろな方々と山を歩くことはとても新鮮で、尚且つ改めて山の魅力、偉大さ、恐さなどこの数か月だけでも感じてました。

学生時代のサッカーで鍛えた身体でしたが、登山となるとまた違うもの。そして登山を行う上で天気、地図、自然…いろいろな知識・経験が必要で、それを少しずつでも得て登山できることは今の自分にとってこの上ない楽しみです。

仕事上、休みが不定期なため、参加できる山行等は限られるかと思いますが、皆様との山行を楽しみにしています。今後とも皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

普段は網張温泉でお待ちしております。近くの山にいらっしゃった際は、お声掛けください。

2 月 例 会 山 行**平成 3 1 年 2 月 1 6 日（土）****宰郷山（367.5m）～大欠山（318）****熊谷敬子**

雪の少ない冬である。それなのにこの日は夜明け前からの雪降り。しかしさほど積もらず、心配するほどではなかった。

8:30 盛岡市太田のテニスコート駐車場をお借りして集合。その後、下山時を考えて、1 台を御所ダムサイドの猿田橋近くに廻しておこうと、遠藤さん、滝浦さんに行き行って貰った。実は幹事である私にはピストン山行しかなく、そのことは頭に入っていなかった。2 月半ばの事とて、ラッセルに時間が掛かるのではと思っていたのである。

さて、駐車場を 8:35 出発。目当ての山の裾を巻く農道を歩くこと 20 分。8:55 登山口の上猪去の稲荷神社着。それにしてもこの辺りには、小さな鳥居を構えたかわいらしい神社が多い。車を廻してくれている 2 人を待って、9:10 登山開始。神社の左手を斜めに路なき路を進む。杉木立の中は、雪こそ少ないが斜度があり雑木の枝や根、笹藪、枯れ枝も落ちていたりして、なかなか進みにくい。苦戦すること 15 分足らず、民家の裏から延びる夏路に辿り着く、稜線へ続く路である。それでも、少ないとはいえ雪に覆われていて路はよく分からない。恰好の読図の訓練になった。若手の両高橋さんがその任に当たり、2 人でトップを交代しながら進む。分岐点では立ち止まって、現在地を地図で確認、進む方向を見定めてから前進するという基本に従った。地図は澤口さんが人数分を準備下さりとても助かった。

9:45 一つ目の平たくなっているピークで休憩、元NHKの電波塔があった所らしい。そこから下りそして登り、10:08 三等三角点の宰郷山々頂に着く。

**宰郷山（三角点を囲んで）**

記念撮影を済ませ、更に西に向かうが、その南側は伐採されて見晴らしが良い。同時に急に風が強まり、止んでいた雪も降り出し、悲鳴の一つも上げたくなる。が、それも長くは続かずほっとする。伐採された山には重機の出入りや運搬用だったと思われる林道がそちこちに出来ていて、ついつい歩き易い方に誘われ勝ちだが、地図を見て大欠山の山頂を目指すこととした。11:20 葛根田地熱線 9 6 の鉄塔通過。11:52 大欠山の四等三角点に至る。名の通り四方が急峻な崖で特に北側は凄い。

昼食を摂り、

12:25 下山開始。路はないが雪も少ないので、歩き易そうな所を見つけてどんどん

**大欠山**

下る。12:40 ダムサイドの猿田橋に着く。この日スノーシュー、輪カンは終始背中ザックに括り付けられたままだった。

置いていた車と更に 2 台に戻って貰い、分乗して 13:05 テニスコート駐車場に到着。簡単なセレモニーの後 13:15 解散。

【参加者 9 名】 熊谷敬子（幹事）

澤口 誠、滝浦弘美、阿部陽子、中屋重直
遠藤征彦、高橋万見子、高木恵美子
高橋瑞穂

平成 31 年(2019 年)度 JAC 岩手支部 山行・事業計画

例会山行・行事	月 日	幹 事	事業区分等、その他
貝吹岳 (田沢湖町)	4 月 20 日(土)	遠藤正子	公益事業 B (観察会、地図読み)
羽山～羽黒山 (北上市)	5 月 18 日(土)	高橋慎一	全国支部懇談会(栃木) 5/25(土)～26(日)
平ヶ倉山 (雫石町)	6 月 22 日(土)	高橋万見子	公益事業 C(環境保全)
高桧能山(奥州市)	7 月 20 日(土)	阿部陽子	
北海道道南(大沼) 駒ヶ岳～恵山	8 月 1 日(木)～ 3 日(土)	中屋重直	大千軒岳を含む
地図読み講習会 (盛岡市) 山の日記念登山 兜明神岳(川井)	8 月 10 日(土)～ 8 月 11 日(日)	澤口 誠 菅原敏夫	公益事業 A(普及) 一般公募
岩手山避難小屋 管理当番	9 月 7 日(土)～ 8 日(日)	澤口 誠	
堺ノ神岳(岩泉町)	9 月 14 日(土)	盛合敏男	
仙人山(北上市)	10 月 12 日(土)	遠藤征彦	東北北海道地区集会 (蔵王古道) 10/5～6(日)
傾城峠(九戸村)	11 月 9 日(土)	久多良謙一	
御在所山(釜石市) 支部忘年会(釜石)	12 月 14(土)～ 15 日(日)	畠 登	忘年会：鶴住居町 民宿「前川」
夏油高原スキー (北上市)	12 月 22(日)	大友厚夫	
小松倉山(雫石町)	2 月 22 日(土)	滝浦弘美	
女助山(雫石町)	3 月 21 日(土)	熊谷敬子	
小桜山～堂ヶ沢山 (花巻市)	2020 年度 4 月 25 日(土)	高橋 耕	

◎岩手支部拡大委員会（2018年12月8日）及び役員会において検討された計画案です。4月7日開催の支部総会において協議決定のうえ実施されます。

JAC 岩手支部通信 第 49 号

発 行 2019 年 3 月 20 日

発行者 (公社)日本山岳会岩手支部長 阿部陽子

編 集 菅原敏夫 suga1040@ginga-net.ne.jp